広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

三重の伝統工芸「擬革紙」×ファッションで地域を元気に

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

1月18日、プレゼンテーションにて

サポートメンバーである生駒氏と意見を交わし、デザインを洗練していく

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

デザイナーである丸川さんは、これまで伝統工芸の「らしさ」が正しく表現されているかを大事にしながら、新しい息吹を吹き込むという「革新」の両立を目指し活動を続けてきた。

丸川さんは「伝統は革新の連続という言葉があるように、世界中のブランドは定期的に世界をあっと言わせる革新を行ってきた。その積み重ねがあって伝統がある」と話す。一方「日本の伝統工芸は革新があるのか」と危惧する。若者が離れていったという言い方をよく耳にするがそうではない。若者に届いていないのだ。このままだと伝統から継承、地域の元気につながらないと考えた丸川さんは、数年前から学校に掛け合い小学生や高校生を対象にデザインの授業を行い、デザインを通じ若者に三重の伝統工芸や良さを伝える活動を始めている。

伝統工芸×ファッションで若者にアプローチ

今回のプロジェクトに参加するにあたり、丸川さんは初めて「伝統工芸×ファッション」のモノ作りに挑戦した。素材として選んだのは三重の伝統工芸〝擬革紙〟。

擬革紙とは和紙を動物の革そっくりに加工する三重の伝統工芸で、それで作ったたばこ入れは江戸時代に参宮みやげとして大ヒットし一大産業に発展した。しかし時代の変遷により衰退し、途絶えることになる。その後現代によみがえらせようと機運が高まり、確証がない口伝えをもとに再興されたのが十数年前。三重にあらゆる恩恵と影響を与えてきた「お伊勢さん」と結びつきが強い擬革紙で地元を活気づけようと丸川さんは思った。紙らしさを崩さず、若者が取り入れやすいものはなにかと考えた結果が擬革紙ネクタイだ。

擬革紙を吟味する丸川さん

プレ・プレゼンテーションの日、サポートメンバーから「ロックを感じさせるネクタイ。折り紙ネクタイは男性がつけるとかわいくていい」という意見を聞くことができ、方向性が間違ってないことを再確認できた。しかしまだ改良が必要だと丸川さんは感じていた。そこでよりスタイリッシュなネクタイにするため幅を5㍉細くし、販売価格を抑えるためネクタイの折り方を改良し、無駄な紙の重なり部分を少なくした。平行して職人と擬革紙の質感と鮮やかな色を出すために何度も夜遅くまで調整を重ねた。

職人と共に試行錯誤を繰り返す

そしてフォーマルでもプライベートでも使用できるようスタイリッシュな印象を与える「スキニータイ」、遊び心が詰まった「折紙ネクタイ」、パーティーシーンでも活躍する「蝶ネクタイ」の三タイプが世に公開された。若者に関心をもってもらうほか、革ではなく紙で作られていることから、乱獲により絶滅の危機にある動物たちへの関心を促すメッセージもこの商品には込められている。

バイヤーからは「擬革紙を初めて知ったが面白い」と反応は上々。「やっぱり擬革紙には可能性がある」と丸川さんは確信した。

完成プロダクト「GiTIE」

擬革紙についてバイヤーに説明する丸川さん

地元伝統工芸を身に着け「他人事」から「自分事」に

丸川さんは「今回のプロジェクトに参加して実りしかない」と話す。

ある高校生に「僕らはなにもない田舎の三重県に生まれた時点でハンデを背負ってるやんか」と言われたことが悔しくて今でも心に残っている。そういったなか、匠に選出されて「個人で何十年かかることを、このプロジェクトの参加により、活動が広く発信され、一気に加速するきっかけになる。またなにより一人だけでやっていないという心強さがある」と丸川さん。擬革紙作りは非常に手間暇がかかり、材料費は決して安くない。反響があると思っていても一歩を踏み出すのに勇気がいる。サポートメンバーとの意見交換は、自分が進んでいる道が間違ってないかを確認することができありがたいとも。

丸川さんは若者が地元の伝統工芸のネクタイを身につけることで、伝統技術や文化を「自分事」として捉えるきっかけになり、ひいては継承や地域の盛り上がりにつながることを願っている。

「型紙作り」「絞り」「着色」など、膨大な行程を経てようやく擬革紙は出来上がる

三重にはほかにも誇れる伝統工芸がある。今回のプロジェクトに参加して海外市場を知っている方々から意見をもらい「改めてグローバルな視点で物事を考えることが必要だと知ることができた」と話し「一方的な見方や既成概念にとらわれず、今後もデザインの視点を生かし、地域を盛り上げていきたい」丸川さんの挑戦は続く。

丸川 竜也
三重県／デザイナー

1972年三重県松阪市出身。1997年に上京、2000年にデザイン事務所「ドラゴンプルームス」を設立。2008年小売ブランド「丸川商店」を立ち上げ、三重県の伝統工芸「松阪木綿」を使ったオリジナル商品を展開。2011年自社オリジナルの「伊勢うどん」を発売。2012年三重県へ戻り、2015年三重県の伝統工芸「擬革紙」を使った動物の折り紙を商品化。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT